

寝殿造成立前夜の貴族邸宅

—右京の邸宅遺跡から—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



東三条殿 (模型 京都府京都文化博物館所蔵)

平安貴族の邸宅というと、寝殿造を思い起こされる方が多いのではないのでしょうか。1町域(約1.4ha)の広大な敷地に、正殿である寝殿と背後に後殿、正殿の左右には対屋などの建物が整然と配置され、各建物間は廊によって繋がれることにより地面に降りること無く往来ができる。また、正殿の前面には池を中心とした庭園が広がり、ここで貴族たちが様々な儀式を優雅に行なったというのが一般的な寝殿造のイメージでしょう。このような寝殿造の姿は、貴族の日記などの文献史料から江戸時代以来の研究によって復元されたもので、代表例としては藤原北家の氏長者の邸宅である東三条殿があげられます。さて、このような

寝殿造はいつごろ成立したのでしょうか。ここでは、近年その調査例が増え様相が明らかになりつつある平安時代前期(9世紀代)の右京域の邸宅遺跡からその答えを探ってみたいと思います。

右京一条三坊九町の邸宅 9世紀初頭の邸宅で、九町の中央北半に正殿と後殿、その左右に脇殿を配置しています。建物群の南側には四脚門があります。各建物は左右対称の配置になっています。主要建物と門の間には、庭園の存在を思わせる遺構は検出されていません。

右京三条一坊六町の邸宅 出土した墨書土器から藤原良相(813～867年)の邸宅であることが明

らかとなっています。六町の北半部には東西に2つの池があり、溝によって繋がっています。西の池の方が規模が大きく、汀には洲浜も作られています。建物は数棟が検出されていますが、それほど規模の大きなものではなく、おもな建物は調査の行なわれていない六町の南半部、西側の池の周辺に存在したと考えられます。

右京三条二坊十六町の邸宅 出土した墨書土器から9世紀後半の斎宮邸であることが明らかになっています。十六町の北半部に主要な建物群と3つの池が配置されています。池の周辺には同規模の建物が数棟存在します。正殿を思わせるような南面する規模の大きな建物がなく、邸宅遺跡としては、

やや特異といえます。伊勢に向かう前の齋王が潔斎を行なう場所としての性格を反映しているのかもしれない。

右京六条一坊五町の邸宅 9世紀中頃の邸宅です。建物群は大きく南北2つに分かれ、北半部は雑舎群、南半部が邸宅の主要建物群と考えられています。南半部の建物群には正殿と後殿、その左右には規模の大きな脇殿が配置されています。このうちいくつかの建物は廊で連結され、建物から他の建物へ直接往来できるようになっています。建物の配置や建物が廊で繋がれる点などは寝殿造に近いものを感じさせますが、この邸宅には池を中心とした庭園は確認できませんでした。

寝殿造の成立へ これまでみてきたように、9世紀代の邸宅には



右京三条二坊十六町の邸宅と園池

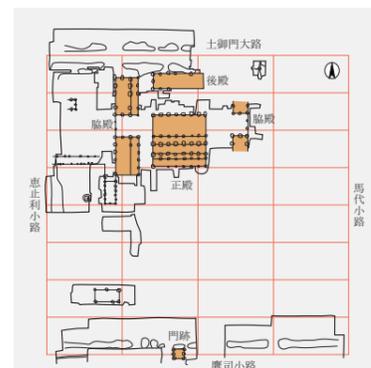
寝殿造の要素をそれぞれに持つものはあってもすべてを備えるものはありません。建物が独立するものや廊で繋がるもの、池を中心とした庭園の有無など様々です。

庭園遺構は、平城京の貴族邸宅ではほとんど検出例はなく、平安

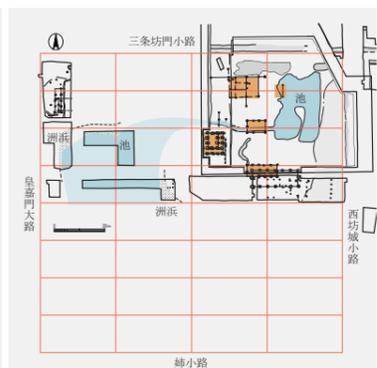
京でも9世紀の前半まではその数は極めて少なく、天皇の京内離宮などに限定されています。平安京の庭園遺構は9世紀の中頃から増加していきます。湧水の多い京都の地形を活かしたことも関係するのでしょうか。しかし、寝殿造の建物配置に最も近い9世紀中頃の右京六条一坊五町では、池は存在せず寝殿造は成立していません。9世紀の右京の邸宅遺跡は、寝殿造成立前夜の様相を示しています。

代々、平安京に住む貴族たちが自らの都市文化を育み、寝殿造という建物が庭園が一体化する住宅様式を成立させるのは10世紀以降のようです。その舞台は、10世紀以降に衰退する右京ではなく、藤原家を頂点とする摂関政治が行なわれた左京となります。この時期は摂関家を頂点とする貴族社会が成熟する時期と重なります。貴族たちの私邸での生活様式が定型化していき、寝殿造という邸宅のスタイルも確立したのでしょうか。

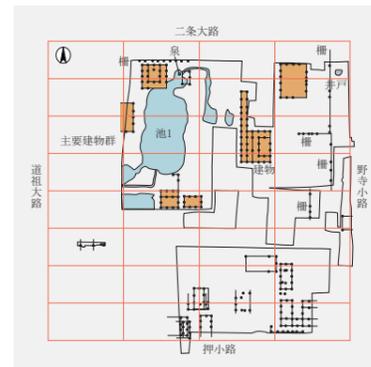
(南 孝雄)



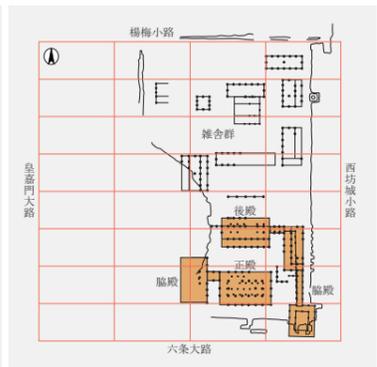
右京一条三坊九町



右京三条一坊六町



右京三条二坊十六町



右京六条一坊五町

平安時代前期の1町規模邸宅